

「安心」から「信頼」へ

— 山岸俊男の著作から —

望月文明

目次

- 一 はじめに
- 二 「安心」と「信頼」
- 三 日米間における「信頼」の差
- 四 「一般的信頼」と人間性検知能力
- 五 —正直ものはばかを見るのか—
社会的ジレンマの問題
- 六 「信頼」の解き放ち理論
- 七 終わりに — 今後の課題 —

一 はじめに

「安心」から「信頼」へ

我々日本人は、自らの国民性を「島国根性」と呼ぶことがある。これは、他国との交渉が少ないため視野が狭く、閉鎖的でこせこせした性質」という意味であり、通常ネガティブな意味で用いられるが、我々がこのような性質を忌み嫌っているのかというと、必ずしもそうとは言えないような気がする。むしろ、このような性質にどこか居心地の良さのようなものを感じている人が少なくないのではなからうか。その場合、居心地の良さを感じ

るのは、「閉鎖的」という部分、すなわち限られた集団成員とだけ親密に付き合い、集団外の人間と付き合う「煩わしさ」を省く、という部分であると思われる。実際、このようなことは現代の日本社会の至る所においてみられているといつて良いだろう。

社会心理学者である山岸俊男は、このような「人々が集団の内部で協力し合っている程度が、集団間で協力し合っている程度よりもずっと強い社会」のことを「集団主義社会」¹⁾と呼んでいる。さらに山岸は、「集団主義社会は安心は生み出すが、信頼を破壊する」²⁾と述べており、信頼の欠如した日本社会は、グローバル化が進む世界事情から取り残されるのではないかと危惧している。しかし、ここで一つの疑念が湧く。確かに我々日本人は閉鎖的、集団主義的ではあるかもしれないが、我々の信頼感果たして弱いであろうか。閉鎖的であると同時に真面目、勤勉というイメージを併せ持ってきた我々はむしろ信頼感の強い民族であると思っっている者が大半であろう。

山岸は「社会的ジレンマ」の研究に端を発し、一〇年以上にもわたって、「信頼」に関する研究を行ってきた。本論では、それらの研究や山岸の思想を紹介することで現代の日本社会の問題点や今後の課題を考えていくことにしたい。

二 「安心」と「信頼」

山岸がいうところの「信頼」とは何であろうか。集団主義社会がもたらす安心の概念と併せてみていくことにする。

山岸は、「信頼」という言葉が実に広い意味で使われていることを指摘し、それらを整理している。例えば、ルーマン(Luhmann, 1979)やバーバー(Barber, 1983)による「信頼」の定義³⁾では、明日も日が昇る、というような自然の秩序の存在に対する期待を含んでいる。道徳的社会秩序の存在に対する期待においても、相手が役割を遂行する能力を持っていることと、意図を持っていることに分けている。このように意味を区分した上で、山岸は相手の意図に対する期待を「信頼」として取り上げて論を展開している。この相手の意図に対する期待についてはバーバーによるものが引用されていたが、わかりやすかったため、ここでも参考として触れておくことにしたい。

相互作用の相手が信託された責務と責任を果たすこと、またそのためには、場合によっては、自分の利益よりも他者の利益を尊重しなくてはならないという義務を果たすことに対する期待⁴⁾

次に「信頼」と「安心」の概念とはどのように区別しているのだろうか。山岸は、「安心」と「信頼」をそれぞれ以下のように述べている。

「安心」とは、相手が自分を搾取する意図を持っていないという期待の中で、相手の自己利益の評価に根差した部分です。(中略)これに対して「信頼」は、相手が自分を搾取しようとする意図を持っていないという期待の中で、相手の人格や自分に対して抱いている感情についての評価にもとづく部分に限られます。⁵⁾

右記によれば、「安心」、「信頼」のどちらも、「相手は自分を騙したりはしない」という期待であるが、安心は相手が「自分も損をするから騙さない」と考えることへの期待であるのに対して、信頼は相手が「騙すことは良くない」というパーソナリティの持ち主であることや、自分に対して「この人は騙したくない」と考えていることへの期待になる。

さらに山岸は、「信頼」は、社会的不確実性の大きな状況で起こるとも述べている。社会的不確実性の大きな状況とは、役割を遂行する相手の意図についての情報が必要とされながら、その情報が不足している状態である。つまり相手を「信頼」することによって、自らの身体、財産、評判等にデメリットが生じる可能性があるということであり、このような危険性がない（社会的不確実性のない）状況では、相手を「信頼」する必要はないことになる。

以上の内容をまとめると、「信頼」するとは、①相手を信じて自分で自分がデメリットを受ける可能性がある状況で、②相手が役割を遂行する意図を持っていることへの期待であり、さらに、③相手の意図がその人のパーソナリティによるものである場合、ということになる。

また、このような「信頼」は他者一般に対する「一般的信頼」⁶⁾と、特定の相手についての情報にもとづく「情報依存的信頼」⁷⁾に区別する必要性も述べられており、山岸が言及する「信頼」とは、「一般的信頼」のことである。

三 日米間における「信頼」の差

前章において、「信頼（一般的信頼）」とは何かを見てきたが、現代の日本人はこのような「一般的信頼」の低い民族なのであろうか。山岸ら（一九九四）は、「ほとんどの人は信頼できる」「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」などといった六項目の『一般的信頼尺度』を用いて、アメリカと日本との間で、比較文化の調査研究を行っている⁸⁾。この種の調査研究は、年代や地域、対象を変えて数多く行われた。これらの研究の結果により、アメリカ人のほうが日本人よりも他者一般を信頼していることが明らかとなった。これらの結果は統計的にも有意であり、性差や対象（学生と一般）による違いもみられなかった。さらに統計数理研究所による同種の研究も紹介されており、その結果も同様であることから、研究の妥当性が示されている。例として統計数理研究所の調査の結果を以下に示す。

「たいていの人は信頼できる」		
アメリカ人	四七%	日本人 二七%
アメリカ人	六二%	日本人 五三%
「たいていの人は、他人の役に立とうとしている」		
アメリカ人	四二%	日本人 一九%

「安心」から「信頼」へ
さらに山岸らは、親しい関係における特定の相手に対する「信頼」のレベルも調査しているが、興味深いことに、それでもアメリカ人のほうが日本人よりも「信頼」が有意に高いという結果が得られている⁹⁾。逆に日本人のほうがアメリカ人に比べて有意に高かったのは、親しい関係における特定の相手からは、特定な扱いを受けるこ

とができる、という信念であった。山岸はこの特別な扱いを「内集団ひいき」と呼んでいる¹¹。これらの結果によれば、我々日本人は集団主義社会に身を置きながら、他者一般はおろか、同集団内の人間でさえも、彼らからの「ひいき」は期待するものの、彼らに対する「信頼」は（アメリカ人に比べて）低いということになり、冒頭で述べた『集団主義社会は安心は生み出すが、信頼を破壊する』が当てはまることになる。なお、その他の実験において、一対一の分配行動という限られた場面ではあるが、相手がどの程度「信頼」するに足るか（信頼性・信頼される側の特性¹²）という点に関しては、日本とアメリカの間に有意な差は見られなかったことを付け加えておく。

集団主義社会はなぜ「信頼」を破壊するのだろうか。我々日本人は、なぜ同一集団内の人間でさえも「信頼」することができないのだろうか。山岸は、その答えを我々のパーソナリティではなく、社会の構造に求めている。これにはまず、日本の集団主義社会のしくみは、相互監視と相互規制によるものであるという観点が挙げられる。つまり、日本人が自分の利益を犠牲にしても、集団に奉仕するのは、利他的な心の性質を持っているというよりは、人々が集団の利益に反するような行動を妨げるような社会のしくみ（相互監視・相互規制）が存在しているということである。山岸が行った実験で、実験室内で被験者同士にお互い顔を合わせる機会を与えないように操作すると、日本人はアメリカ人に比べて、自発的に協力しようとする程度や集団にとどまろうとする程度が低いという結果が得られたことは、相互監視や相互規制の存在を裏付けているといえよう。土井健郎が、日本人は「身内」や「他人」には「甘え」が存在するのは裏腹に、その中間に存在する「知り合い」には「遠慮」が存在することを指摘していることや、井上忠司のいう『世間体』の存在¹³も、相互監視、相互規制の集団主義社会に当てはまる。

また、我々が集団内に「ひいき」という特定の扱いを過剰に期待することにも問題があるだろう。このような「ひいき」を媒介とした関係は、たとえ、はじめは互いを信頼していても、次第に「ひいき」を得るための関係へと移行してしまう傾向がある。外部から賞や報酬を得ることによって、内発的な動機付けが低くなってしまっているのである。

四 「一般的信頼」と人間性検知能力——正直者はばかを見るのか——

前章で、日本社会において「信頼」が存在しないのは、相互監視・相互規制や、「ひいき」を媒介とした社会のしくみに原因があることを述べたが、もう一方で、我々日本人には、「他者一般を信じる人は、騙されやすいお人好しである」という、いわば「信頼」に対する不信感のような通念がある。「この世知辛い社会において、他者を信頼するようないことを言っているのは痛い目に遭う」というような具合である。これに関して、山岸は興味深い実験をいくつか行っており、そのうちの二つを次に紹介する。

山岸は先に紹介した『一般的信頼尺度』を用い、その得点によって、あらかじめ被験者を高信頼群と低信頼群に分けた後、場面想定法により、場面に登場する人物がどの程度「信頼」に値する行動をとるか予想させている。その際、被験者には登場人物が信頼できることを示唆するポジティブな情報と、逆に信頼に値しない人物であることを示唆するネガティブな情報の、二種類の情報が与えられた。この実験の結果、ポジティブな情報が与えられた場合には、高信頼群と低信頼群との間に信頼性の評定上昇の程度に大きな差は見られなかった（高信頼群のほうが評価は高かった）が、ネガティブな情報が与えられた場合には、低信頼群よりも高信頼群の方が急速に評価を下げた。つまり、高信頼者は低信頼者よりも、相手が信頼できる人間か否かを示唆する情報に敏感に反応し

たことになり、他者一般を信頼する人は「騙されやすいお人好し」であるところか、「注意深い」人間であるということになる。

この実験以外にも、信頼感の高低と騙されやすさの間には相関がないという他の心理学者の結果(Rotter, 1980¹⁷)や、実験室における分配行動の際に、高信頼者のほうが低信頼者よりも相手の行動を適切に予測したという結果(菊池・渡邊・山岸, 一九九七)¹⁸などがあることから、「他者一般を信じる人は、騙されやすいお人好しである」という一般通念は、一概に正しいわけではないことがわかる。むしろ、他者一般を信頼する人は、ただ他人を信頼しているのではなく、相手が信頼できるか否かを見分ける人間性検知能力を身につけた上で、一時的に他人を信頼できると考えるゆとりを持つ者である、と考えることができる。

この「一般的信頼」と人間性検知能力の因果関係について、山岸はいくつかの可能性を挙げているが、その中で以下のような説明をしている。

他者の信頼性(とくにその欠如)を示唆する情報に敏感で、相互作用相手の信頼性を正確に見抜く能力を持っている人間は、とりあえずは(つまり、相手についての情報のない状態でのデフォルト値としては)相手を信頼できるものと考えておいても、それほどひどい目にあわないですむだろう¹⁹

これは、一般的信頼が、人間性検知能力が発達する上でのいわば副産物のようなものである、という考えである。

五 社会的ジレンマの問題

これまで「信頼」とその背景について述べてきたが、ここでは社会的ジレンマの問題を取り上げることにする。それは社会的ジレンマの問題が人間社会にとって根本的な問題であり、また問題の解決と「信頼」とが密接に関係しているためである。

まず、社会的ジレンマとは何かについて、『社会心理学小辞典』には次のように述べられている。

自分の行動が他成員の行動選択に与える影響を無視して個々人が自分にとって最も有利な行動を選択すると、それぞれの成員自身にとって望ましくない結果が生まれることになる集団成員間の関係の構造²⁰

つまり、社会的ジレンマの問題とは、個人の利益と集団全体の利益の相互関係によって起こるものであり、特に二対一の人間関係の場合には囚人のジレンマ²¹という。社会的ジレンマ問題の代表例としては、環境問題や公共財とフリー・ライダー(ただ乗り)の問題などきわめて重要なものがある。この社会的ジレンマに関する研究は、これまで数多く行われているが、山岸はそれらの結果の最も重要な点として『他の人たちが協力してくれるという期待がもてないときには、ほとんどの人が協力的な行動をとらない』ことを指摘している。²²

山岸自身も何年にもわたって社会的ジレンマの研究をしており、その解決策を探っている。例えば囚人のジレンマや、小さくて継続性のある集団のケースでは、協力には協力、非協力には非協力と相手の行動に合わせて反応することで相互協力の状態へと導く、『応報戦略』が効果的であることを見出している。²³しかし、これは集団が

「安心」から「信頼」へ

ある程度以上大きくなると、近視的な利己主義者のために全員非協力の状態に陥ってしまい、通用しなくなってしまう。この場合には、「賞や罰を与える」²³ことや「非協力者を罰しない人を罰する」²⁴などの解決策が見出されているが、それぞれ一時的な解決となっても、根本的な解決には至っていない。時間が経つと更に程度の強い賞や罰が必要となったり、最終的に罰する人（非協力者を罰しない人を罰する人）が罰しなくなった場合など、結局同じ状態へと戻ってしまうのである。

社会的ジレンマの解決を考えるにあたって山岸がとっている基本的な立場は、先の応報戦略による相互協力にみるような、『利己主義を徹底させると利他的行動に行きつく』という立場である。²⁵相手に協力すれば相手からの協力が得られる、それによって個人るときよりも大きな利益を得ることができる場合には、利己主義者でも積極的に利他的行動をとる可能性があるとということである。このポイントには、「相手に協力すれば相手からの協力が得られる（だろっ）」、と行為者が推測する点にある。すなわち、「お互い様の関係」が成立することに關しての、相手への期待である。このような相互協力を望む利己主義者を、山岸は「利他的利己主義者」と呼んでいる。²⁷但し、「お互い様の関係」が成立しないような場合、利他的利己主義者は一転して、非協力という態度をとる。集団が大きくなると応報戦略が通用しない、のがそれである。

社会的ジレンマの状況では、全員が協力すれば全員が得をするのに、結局それぞれが自分の利益を追求してしまふ、いわゆる衆愚の状態であるわけだが、利他的利己主義者の「お互い様の関係」成立への期待を「信頼」と呼べば、衆愚の状態は社会への「一般的信頼」の欠如が原因となっているために他ならない。環境問題や公共財とフリー・ライダー（ただ乗り）など、社会全体に及ぶ大きな問題の解決には、各個人の「一般的信頼」を高めること、もしくはそれが高まるような社会環境を創り出すことが不可欠なのである。

六 「信頼」の解き放ち理論

山岸は一連の調査や実験研究の結果から、「信頼の解き放ち」理論を提唱している。²⁸山岸によれば、それまでの信頼に関する研究は、特定の相手との関係を強化する役割にばかり注目したものであった。「解き放ち」理論により、信頼にはもう一つの役割、固定した閉鎖的な関係から人々を解き放ち、新しい相手との関係を求めるのを助ける役割があることを示した。『信頼』には関係を強化するだけでなく、拡張する機能がある。²⁹この点が山岸理論の最も重要な理論的貢献である。

この「信頼」の関係拡張の機能について、もう少し詳しく見ていくことにする。冒頭の部分で述べた通り、日本は集団主義社会である。このような社会では、集団内の社会的な不確実性を低めることで、「信頼」の代わりに「安心」を生み出し、それぞれの集団で安定を保ってきた。このような社会には一見、大きな問題は存在しないように思われるが、「安心」「安定」を得るのと同時に、集団外に存在するかもしれない「より良い機会」を逸してしまう。山岸はこの機会の喪失を『機会コスト（費用）』³⁰と呼んでいる。機会コストとは一般的には、ある行動に投資した費用や時間を別の行動に投資した場合に得られる利益のことである。これは、集団主義社会では、集団内での活動が中心となるため、外での「より良い機会」に関する情報を知るチャンスが少ない、という意味だけではない。この他にも、山岸は以下の二つの理由を挙げている。一つは、集団内の社会的な不確実性を低めれば、相対的に外部のそれが高く感じられ、（外部の）相手を信頼することが困難になる点である。もう一つは、集団内に愛着や忠誠が芽生えてくると、たとえ「より良い機会」の存在に気がついていても、すぐに移ろう、という気にはなりにくい点である。これに対して、「一般的信頼」が培われることで、以上のような機会コストは低下し、我々

はより自分に適した相手や条件を選ぶことができるようになる、というのが山岸の「解き放ち」理論の主張である。

しかし、このような主張によって、すぐに人々が「より良い機会」を求めて機会コストを低減するために、外部の相手を積極的に信頼するようになるとは限らないであろう。「より良い機会」は未知の部分が大きだし、また、最後に挙げた集団内の愛着や忠誠を、我々日本人は「義理」や「人情」と呼び、美德と捉える傾向もある。但し、集団内の結束は美德であり、「信頼」はその媒介になるものである、という「信頼」への一面的な理解から、関係拡張の機能へと意味を広げたことは非常に意義深いといえるだろう。

七 終わりに——今後の課題——

昨今、アメリカを代表とする西欧諸国では、「信頼」に関する研究が盛んである。これは民主主義や自由主義経済の基盤と考えられてきた「一般的信頼」が、近年急速に低下していることへの警鐘であるらしい。日本における「信頼」の研究はそれほど多いわけではないが、これは「信頼」を必要としないことを意味しない。日本社会に山積みされている問題の中にも、国民の「一般的信頼」が高まることによって、解決、改善の方向へと向くものが多いはずである。むしろ、問題や事件の内容からは、日本社会も二一世紀を迎えるにあたって、「安心」から「信頼」への転換を迫られていると考えても良いのではないだろうか。「我々はディフェンシブで、パッシブだから」と国民性の責任にして、開き直ってはいられない現実があるように思える。

山岸の主張の中に、「信頼が個人に利益を与える環境とそうでない環境、そのいずれもが生活している人々によって創り出されている³⁰⁾、というものがある。我々自身の力で、環境を変えていくことができると言うのであるが、一体どのようなようにして「信頼」を育てていくのだろうか。その一つの例として、山岸は「政治をはじめとする様々な組織の情報開示、情報の透明性を高めること」³¹⁾を挙げているが、これにはさらに根本的な問題解決が必要なのではないかと思われる。この点が残された今後の課題であると言えよう。

私自身としては、個人の物事に対する認識や思考のスケールを広げることが重要であり、それを促すような教育が必須ではないか、と考えている。「社会的ジレンマ」の章で、利他的利己主義者について触れたが、「利益(損失)とは何か」をより広く、大きく考えることのできる人間は、一時的なものや数字となって現れる利益に振り回されることなく、必要であれば協力的な態度を積極的にとることができるであろう。山岸は、「自己利益を追求する手段として他人を信頼するようになる」と考えるのは誤解である³²⁾、と言っている。

人間の社会には意識的に自己利益を追求しない人間——信頼に値する人格の持ち主や他者一般を信頼する人間——の方が、意識的な自己利益の追求者よりもうまくやっているとける環境が存在している³³⁾。

山岸のいう、自己の利益に翻弄されないことと物事を認識、思考するスケールの大きさには大きな相関があるように感じられる。

「安心」から「信頼」へ

また、冒頭で「集団主義社会は安心は生み出すが、信頼を破壊する」という引用を紹介したが、これは単に西欧の個人主義に倣うべきである、ということの意味しているわけではないであろう。元来、人間は集団的な生き物であるはずだ。個人間だけでなく、集団間の信頼に関しても考えてみる必要があるのかもしれない。

近代以来、人類は生産や作業の効率性を求める余り、個人の知識が専門的に偏る傾向があったように思われる

が、そのような知識とそれを扱う認識力、思考力の幅を広げることは、自己理解、他者理解の双方へとつながり、個性を尊重した上で集団を大事にするような社会、ひいては「一般的信頼」の高い社会を築いていくであろう。

〈註〉

- (1) 山岸俊男 『信頼の構造』 (東京大学出版 一九九八) 一頁。
 - (2) 同右書 一頁。
 - (3) 同右書 三三三頁。
 - (4) 同右書 三五五頁。
 - (5) 山岸俊男 『安心社会から信頼社会へ』 (中公新書 一九九九) 二二頁。
 - (6) 『信頼の構造』 四二頁。
 - (7) 同右書 四二―四五頁。
 - (8) 同右書 八九―九三頁。
 - (9) 『安心社会から信頼社会へ』 二六―二七頁。
 - (10) 『信頼の構造』 九三―九七頁。
 - (11) 同右書 九四―九七頁。
 - (12) 同右書 四八―五〇頁。
 - (13) 『安心社会から信頼社会へ』 二二〇頁。
 - (14) 土井健郎 『「甘え」の構造』 (弘文堂 一九七二)。
 - (15) 井上忠司 『世間体の構造』―社会心理学史への試み― (NHKブックス 一九七七)。
 - (16) 『信頼の構造』 二〇―二五頁。
 - (17) 同右書 二四頁。
 - (18) 同右書 一七〇―一七三頁。
 - (19) 同右書 一七六頁。
 - (20) 古畑和孝編 『社会心理学小辞典』 有斐閣 一九九四 一〇四頁。
 - (21) (prisoner's dilemma) ゲーム理論の扱うゲーム事態の一つで、複数の共犯者が互いに隔離されたコミュニケーションを断たれた状況下で自分を強要された場合、自白すれば彼の罪は軽減されるが共犯者を罪におとし、黙秘を通せば共犯者を罪におとさずに済むが、もし共犯者が自白してしまえば彼が最も罪が重くなる。彼は共犯者に対する信頼と猜疑に悩み黙秘と自白のジレンマに陥る。
- 東洋、大山正他編集 『心理用語の基礎知識』 (有斐閣ブックス 一九七三) より。

- (22) 『安心社会から信頼社会へ』 二九頁。
- (23) 山岸俊男 『社会的ジレンマのしくみ』 (サイエンス社 一九九〇) 六〇―六四頁。
- (24) 同右書 一〇四―一四四頁。
- (25) 同右書 一六三―一六六頁。
- (26) 同右書 二二〇頁。
- (27) 同右書 四一頁。
- (28) 『信頼の構造』 五五―八八頁、『安心社会から信頼社会へ』 五五―八八頁。
- (29) 『安心社会から信頼社会へ』 七一頁。
- (30) 『信頼の構造』 一五〇頁。
- (31) 『安心社会から信頼社会へ』 二四二頁。
- (32) 『信頼の構造』 八六頁。
- (33) 同右書 八六頁。